

六月付けで辞令が出て、元勤めた大八村役場へ行き、高山社や、片倉製糸の養蚕技手となり、さらに入生川一村の県農協に勤め、昭和二十五年九月二十八日岐阜県高山蚕技術指導所の技術普及員、三十年三月、岐阜県農林部の技師を退職しました。

九死に一生を得て今日あるのは、士族だった父親の教育、しつけが厳しかったため、そのお陰だと感謝している。したがって、第二補充兵の苦労は知っているので、あまり酷<sup>き</sup>しいことはしなかったし、マスバテ島での自活中も公の業は私のために使わなかった。また、戦友相助け合って生き帰ることができましたが、部隊のほとんどの将兵は比島あるいは海域で戦死したことは永遠に忘れることができず、御冥福を祈っております。

## バタン半島・

### コレヒドール島従軍記

神奈川県 川島増造

昭和十三年四月、徴兵検査で甲種合格となり、昭和十四年一月十日に横須賀重砲連隊第二大隊第三中隊第六班に入隊しました。中隊長は大井勇三大尉(陸士卒)。頭に軍帽、腰に剣をつけて初年兵の第一歩を踏みだしました。

一般教育訓練後、一般兵、通信兵、観測兵に分かれ、小生はその観測兵になりました。任務は二十四センチ榴弾砲の射撃諸元を、観測所で目標陣地の座標方向・射角・距離等を三角法を駆使して測定し、その測定値を速やかに砲列に伝える任務を持っている。訓練は横須賀地区の島山、衣笠山、大楠山、安神隊などの山々を重量物の野戦重測速機並びその脚を背中に背負って駆け回り、誠に過酷な訓練で、疲労困憊の極に達し、

隊に帰る毎日でした。夜は古参兵の精神話とびんたを食う明け暮れでした。

また、横須賀地区の「米が浜」砲台では、二十八センチ榴弾砲の操法及び海岸より侵入する敵艦艇の射撃を想定して、観測法一点図解の測定法の訓練です。班長に頭を叩かれ生傷が絶えないほどの厳しい訓練を受けたものです。

翌昭和十六年五月に突如動員令が下り、防暑假が支給され、南方へ従軍とのことで、家族を兵営に呼び面会をすることになりましたが、これが今生の別れと覚悟していました。

編成部隊は独立白砲第十五大隊（隊長吉田中佐）。この白砲は特殊な大砲でドイツの加砲と聞いています。射程は一千メートル弱ですが、弾丸は重く威力は抜群とのことでした。

部隊は佐世保港より台湾基隆港に向かった。基隆港より台北に行き、十月ころまで台北練兵場にてその加砲の操法の訓練をしました。翌十一月、隊は高雄港に集結しました。

昭和十六年十二月八日、日本は西太平洋で米英と戦闘状態に入り、宣戦布告の報と同時に隊はフィリピン・リンガエン湾に敵前上陸を敢行、バタン半島で善戦し、半島のサマツト山を目標に進撃しました。山の周囲には各隊の砲列をできる限り集結するため多大の犠牲を払って布置しました。

昭和十七年五月二十七日午前六時ころを期して一斉に発砲開始、かつ友軍の空爆を加えて夕刻までまるで太鼓を敲くがごとくに発砲、正に阿鼻叫喚の修羅場と化し、サマツト山が変形するごときでありました。大量の弾丸が打ち込まれる転進作戦です。敵兵の退却しつつあるを掃討し、また途中友軍の将兵も多く死亡する戦闘でしたが、ついにバタン半島を攻略しました。

引き続き次の作戦はコレヒドール島の攻略作戦です。コレヒドール島上陸作戦の前夜、今夜か明日一日の生命だと思ふと一抹の寂しさが押し寄せてきました。二十五歳、折角この世に生を得て、この体を異国の名もない土地に捨ててしまふとは、と思ひ、最後かもしれない南国の月を眺めつつ故郷を慕ってひそかに別れを

告げ、遺言も書きました。

隊員は大発艇に乗り込み、燦々と輝く星空の下、対岸のコレヒドール島へ進んだ。途中敵は待つてまじたとばかり一斉に照明弾、曳光弾を打ち上げ、島のバリケードより弾が飛来する。大発より少しでも頭を上げようものなら撃たれ海中に落ちていくのを見ながらも、自分は死に対する恐怖は少しも感じなかった。

目的のコレヒドール島に乗り上げると、岸にはコールトールが敷き詰めてあり、軍刀は餅のように食いついてどうにもならない。一夜岩陰に潜伏し、翌朝敵陣地に対して攻撃を開始しました。

戦闘中突如米軍は白旗をかざして降伏してきました。第六十一連隊長・佐藤大佐はこれを認め戦闘を一時中止しました（その間マッカーサー元帥は再度来ることを約し本国に退却したと聞く）。しばらくして再び発砲してきたので、佐藤大佐は先の降伏を認めぬのことで再び攻撃を開始し、ついに全面的にコレヒドール島を完全攻略しました。

爾後、マニラに全部隊が集結し、昭和十七年七月、

横須賀に九死に一生を得て帰還しました。

### 〔補 足〕

―バタン半島・コレヒドール島従軍記―

独立白砲第十五大隊は、昭和十六年十月五日、横須賀重砲兵連隊で編成、同年十一月十六日宇品出帆、同月二十一日基隆上陸、十二月三十日高雄出帆、ルソン島上陸、戦闘参加、昭和十七年七月十七日マニラ出帆、八月二日宇品上陸、昭和十九年六月一日以降千島択捉島で従軍している。

同大隊が参加したフィリピン、バタン半島・コレヒドール攻略について補足する。

昭和十七年一月三日、南方軍は第十四軍（比島作戦担当）は、マニラを攻略、従来の攻略任務から安定確保の新任務に変わる。しかも群島内要地の占領と軍政の普及の二つの任務を課した。バタン半島及びコレヒドール要塞の処理は、輕易な掃討作戦と見なしているようであった。

第十四軍は、すみやかにバタン半島の攻略を企図するとともに、第四十八師団（海）をマニラ付近に集結して次期作戦を準備させるため、一月七日、午前八時、おおむね次のように部署した。

一、第四十八師団は、第六十五旅団の進出にともない、戦線を同旅団に委譲する。

二、第六十五旅団は、第四十八師団と戦線を交替し、前任務（一部を以てオロンガ東方隘路口、主力をバラング付近に進出）を続行する。（同旅団はリンガエンから昼夜兼行で急進し、未知の戦場に直面させられた不利な立場からして、前任の第四十八師団同様の威力を発揮できるか否かを考慮しなければならなかった）。

第六十五旅団の主要兵力 長奈良中将

歩兵第一二二連隊、同一四一連隊、同一四二連隊、  
旅団工兵、同通信隊、同野戦病院、歩兵第九連隊、  
独立速射砲二個中隊、戦車第七連隊、

野砲兵第二二連隊第二大隊、

山砲兵第四八連隊の二個大隊、

野戦重砲第一・第八連隊、独立重砲第九大隊、  
独立臼砲第一五大隊（三〇センチ）、工兵第一六連隊、ほか工兵、電信、自動車、輜重、ほか……  
内、独立臼砲第一五大隊は「エンゼルス」に到着せば引続き兵站自動車に依り前進し十二日夕までに「バラング」付近に進出すべし。

一月十三日、軍は第六十五旅団方面の戦況が思うように進展しないで、軍は第十六師団長に対し、歩兵第二十連隊を基幹とする部隊をヘルモサに派遣を命じた。

昭和十七年三月十八日の第十四軍第二期作戦計画六、「コレヒドール」島要塞に対する攻撃は「バター」半島攻略後所要の準備を整えたる後之を行う。  
七、前記作戦に呼応し海軍と協同し陸海正面の封鎖を強化し「バタン」半島及び「マニラ」湾要塞に対する敵後方補給を完全に遮断するに努む。

兵団の部署及び行動での軍隊区分によれば独立臼砲

第十五大隊は第四師団（大阪）の配属部隊（独立臼砲第二大隊―一五センチと共に）となっている。

三月二十二日、第十四軍のバタン半島陣地攻撃大綱の各兵団攻撃準備命令の六、

「軍砲兵司令官ハ軍主力方面ニ於ケル第一線兵団ノ攻撃準備ニ協力シ特ニ敵ノ砲兵ヲ求メテ制圧撲滅スルト共ニ四月二日迄ニ主力ヲ以テ「バランガ」西方ヨリ「ナチブ」東南麓ニ互ル地区ニ展開シ総攻撃當日第十六十五旅団及第四師団ノ各主力砲兵ノ指揮ヲ統一シ攻撃準備射撃ヲ実施シ爾後軍主力ノ攻撃ニ直接協力スル如ク準備ス（独立臼砲十五大隊ハ第四師団配属）」

当時の第十四軍の大口徑砲を列記してみると、

軍砲兵隊、野戦重砲兵、一五センチ榴弾砲一個連隊

（一中隊欠）、同一〇センチ加農砲一個連隊（一中隊欠）、

独立重砲第隊（一五センチ加農砲）、重砲兵一個連隊（二

四センチ榴弾砲）、独立重砲兵一個連隊（二四センチ榴

弾砲）であり、三〇センチ口径砲は体験記執筆者・川

島氏所屬の独立臼砲十五大隊のみであった。

第四師団の第二次「バタン」半島攻略戦の攻撃計画（三月二十二日）で独立第十五大隊は右翼隊（師団主力）に属している。

四月三日、軍砲兵隊は九時、効力射撃準備射撃を実施、比島軍砲兵司令官は一〇六門の砲兵を統一指揮し、各兵団の七五ミリ以上の火砲を加えると約三百門近い火砲が、サマツト山を中心とする陣地に集中され、更に約百機の重・軽爆撃機が爆弾を投下した。